新古今和歌集古筆切拾穂

舟見一哉*

一、はじめに

『新古今和歌集』の伝本は、集の編纂過程がまず想定され、それに整合させる形で分類されてきた。すなわち、竟宴時の本文を伝える第一類本、切継等の編纂過程の本文を伝える第二類本、切継作業完了時の本文を伝える第三類本、後鳥羽院によって精撰された第四類本（隠岐本）という四つのカテゴリーがまず設けられ、そのいずれに属するのが適当か、という視点から伝本は分類されてきたのである。この分類によると、冷泉家時雨亭文庫蔵隠岐本や六条宮本系隠岐本が第四類本であることを除いて、その他のすべての現存伝本は第二類本に分類せざるをえない。その結果、第二類本というカテゴリーには、様々な本文を有する多様な伝本が混在することになった。

拙稿 2007・2008 では、第二類本とされている穂久邇文庫蔵本と伝冷泉為相筆本（国立歴史民俗博物館蔵）との間に、詞書が大きく異なる箇所があることを指摘し、あわせて、鎌倉期の書写にかかる伝二条為氏筆切などの古筆切には、また別の多様な本文が存することも指摘した。その結果、これらすべてを従来のように第二類本として一括りにするのは適当ではなく、伝為相筆本に代表される伝本と大きく相違する本文をもつものは、撰者による同一歌の差し替え作業といった編纂過程の一端を伝えるものか、あるいは後世に変容を来したものであろうと考えた。拙稿 2007 で挙げた伝本間の相違点のうち最も特徴的な箇所を二つ再掲する。

（1）

○穂久邇文庫蔵本（一七四五番）

延喜御時、女蔵人内近、馬節會みけるくるまより、くれなゐのきぬをいだしたりけるを、藤原中正左衛門権佐にて侍けるがみて、たゞさむとしければ、中正わらはをよびていひつかはしける　女蔵人内匠

おほぞらにてるひのいろをいさめてもあめのしたにはたれかすむべき　加階しければたゞさずなりにけり

○伝為相筆本

延喜御時、女蔵人内匠、白馬節會見けるに、くるまよりくれなゐのきぬをいだしたりけるを、検非違使のたゞさんとしければいひつかはしける　女蔵人内匠

おほぞらにてる日のいろをいさめてもあめのしたにはたれかすむべき　かくいひければたゞさずなりにけり

（2）

○伝二条為氏筆切（一七五六番・慈円歌）

うちたへてよにふる身にはあらねともなをとし月をへんそかなしき

＊一般科　助教

○他本　第四・五句「あらぬ筋にも罪ぞかなしき」

拙稿 2007 で示した右以外の古筆切の例のなかには、本文異同と呼ぶには細かすぎるものもあり、「よりよい資料に基づいて歌を入集するために行われた、編纂過程における同一歌の差し替え作業があった」という仮説には説得されるところが少ないという意見もある。しかしながら、『新古今和歌集』の成立に極めて近い時期に書写された伝本や古筆切に、和歌二句におよぶ本文異同や詞書の大きな相違があることも事実であるから、その本文異同に撰者が関わるか否かについては再考すべきではあるけれども、現在の第二類本というカテゴリーをいちど解体し、実存の本文に即した伝本の再分類が必要であるという考え方は、やはり有効であると考えている。

二、架蔵断簡について

『新古今和歌集』には、成立時期に近い時期に書写された完本が比較的多く残されている。本文に基づく伝本系統の再構築という作業において、これらが主な資料となることはいうまでもないが、同時に、古筆切の存在にも着目する必要があることは拙稿 2007・2008 で示した通りである。

『新古今和歌集』の古筆切は『古今和歌集』に次いで豊富に残されている。『古筆学大成』等の主要文献に収録されていない古筆切についても小林強氏 1999 の集成があり、また、久保木秀夫氏によるデータベースが公開されたことによって、『新古今和歌集』の古筆切の調査は非常に簡便になった。ただし、古筆切の宿命として、わずか一葉の存在では学問的批判に耐えることができないという致命的欠陥がある。一葉でも多くのツレが紹介され、集成されなければならない。そこで本稿では、本文に基づく伝本系統の再構築という作業の基礎的作業の一環として、架蔵の新古今和歌集切三葉を紹介し、些かの考察を加えたい。

(1)伝西行筆切

『新古今和歌集』巻第四・秋歌上・302

縦 18.9 ×横 5.1 糎（字高 17.5 糎）

楮紙打紙

鎌倉時代末期写

〔翻刻〕

早秋といへる心をよませ侍ける

法性寺入道関白太政大臣

あさきりやたつたのやまのさとならて

秋きにけりとたれかしらまし

〔図版〕↓図版1

右端に閉穴の跡があることから、もとは綴葉装の冊子本であったと推定される。閉穴の位置からすると上部は数粍断ち切られたらしい。隠岐本での除去符号や撰者名注記は本来的に有していなかったのであろう。付属の極札は古筆家のものではなく、手鑑に仕立てた際に付けられたもの。裏面は白紙であり、そのほかに伝承筆者を伝える記述はない。西行の筆跡とは認めがたく、やや時代が下った鎌倉時代末期頃の書写とみて大過なかろう。「多」「万」「志」に筆癖があるほか、詞書を和歌より4糎程度下げて書写する点にも特徴がある。

『古筆学大成』等の主要文献には同一筆跡と思われるツレが見いだせなかった。また、小林強氏 1999 によると、西行を伝承筆者とする新古今集切として、『思文閣古書資料目録』一一七号掲載の「集古美葉」、『古典籍下見展観大入札会目録』(H7.11) の№五一が紹介されているが、いずれも異筆である。

当該断簡の本文は、切継作業完了時の本文を伝えている可能性が高いと稿者が考えている伝冷泉為相筆本（撰者である定家の書写本を親本とする）と同一である。なお、302 番歌は隠岐本において除去された歌であるから、当該断簡は隠岐本系統ではない。

当該断簡は本文に特徴があるわけではないが、その書写年代の古さからして注目して良い資料であろう。

(2)筆者未詳新古今集切(一)

『新古今和歌集』巻第十三・恋歌三・1195

縦 24.3 ×横 4.2 糎（字高 23.0 糎）

楮紙打紙

室町時代初期写

〔翻刻〕

けふと契ける人のあるかととひて侍(ママ)けれは

読人不知

夕暮に命かけたるかけろふのありやあらすや問ふもはかなし

〔図版〕→図版2

もとは四半形の冊子本。上下に断ち切られた痕跡は見いだせないので、撰者名注記などは有していなかったと考えられる。極札や裏書などはなく伝承筆者は不明。しかし、筆跡から室町時代初期頃の書写と思われる。『古筆学大成』等の主要文献にツレは見いだせていない。さきの伝為相筆本とのあいだに本文の異同はない。

(3)筆者未詳新古今集切(二)

『新古今和歌集』巻第十九・神祇歌・1910 ～ 1914

縦 15.8 ×横 15.4 糎（字高 14.8 糎）

楮紙

室町時代初期写

〔翻刻〕

よみ人しらす

いはしろのかみはしらなんしるへせよ

たのむうき身のゆめの行すゑ

くまのゝ本宮やけてとしの

うちに遷宮侍しにまいりて

太上天皇

ちきりあれはうれしきかゝるおりにあひ

ぬ忘るな神も行すゑのそら

かゝのかみにて侍けるときしら山

にまうてたりけるをおもひいてゝ

日吉の客人の宮にてよみ侍り

ける

┄┄┄┄（以下裏面）┄┄┄┄

左京大輔（ミセケチ「夫」）顕輔

としふともこしのしら山わすれすは

かしらの雪をあはれとも見よ

一品聡子内親王すみよしにまう

てゝ人々哥よみ侍けるによめる

藤原道経

すみよしのはまゝつかえもかせふけは

なみのしらゆふかけぬまそなき

あるところの屏風の絵に十一月

神まつる家のまへに馬にのりて

人の行ところを

能宜朝臣

〔図版〕→図版3

もとは六半形の冊子本。撰者名注記などは有していなかったと考えられる。こちらも極札等が無く伝承筆者は不明だが、筆跡から室町初期頃の書写であろう。『古筆学大成』等の主要文献にはツレが見あたらない。

伝為相筆本をみると、道経歌と能宜歌のあいだに切り出し歌が一首（津守有基歌）あったことが確認できるが、当該断簡はその一首を切り出した形で書写されている。また、伝為相筆本と比較すると、以下のように若干の異同が見いだせるが、いずれも誤写の範疇であろう。

当該断簡　　伝為相筆本

1910　たのむうき身の　―　たのむうき世の

1913　はまゝつかえも　―　はまゝつかえに

なお、道経歌については、穂久邇文庫蔵本では第五句「かけぬひぞなき」とある。やはり穂久邇文庫蔵本の本文は精査する必要があるようだ。

三、おわりに

右の三葉は、管見の範囲ではいずれもツレを見いだせていない。既に述べたように、古筆切は一葉でも多くのツレを集めなければ、書写年代の古さという貴重な特質を生かすことができない。右の三葉を公開することによって新たなツレが見いだされることを期待する。

『新古今和歌集』の古筆切の多くは、未だ整理されることなく各地に残されている。これらを整理し、完本を中心としつつ、古筆切の本文にも着目した伝本系統の再構築を行っていきたいと思う。大方のご教示を御願い申し上げる。

〈引用参考文献〉

（1）舟見一哉:「棄てられた本文　―伝二条為氏筆新古今和歌集切を端緒として―」,『京都大学國文學論叢』第18号,pp18-49,2007

（2）舟見一哉:「伝二条為氏筆新古今和歌集切　補遺」,『京都大学國文學論叢』第19号,pp25-35,2008

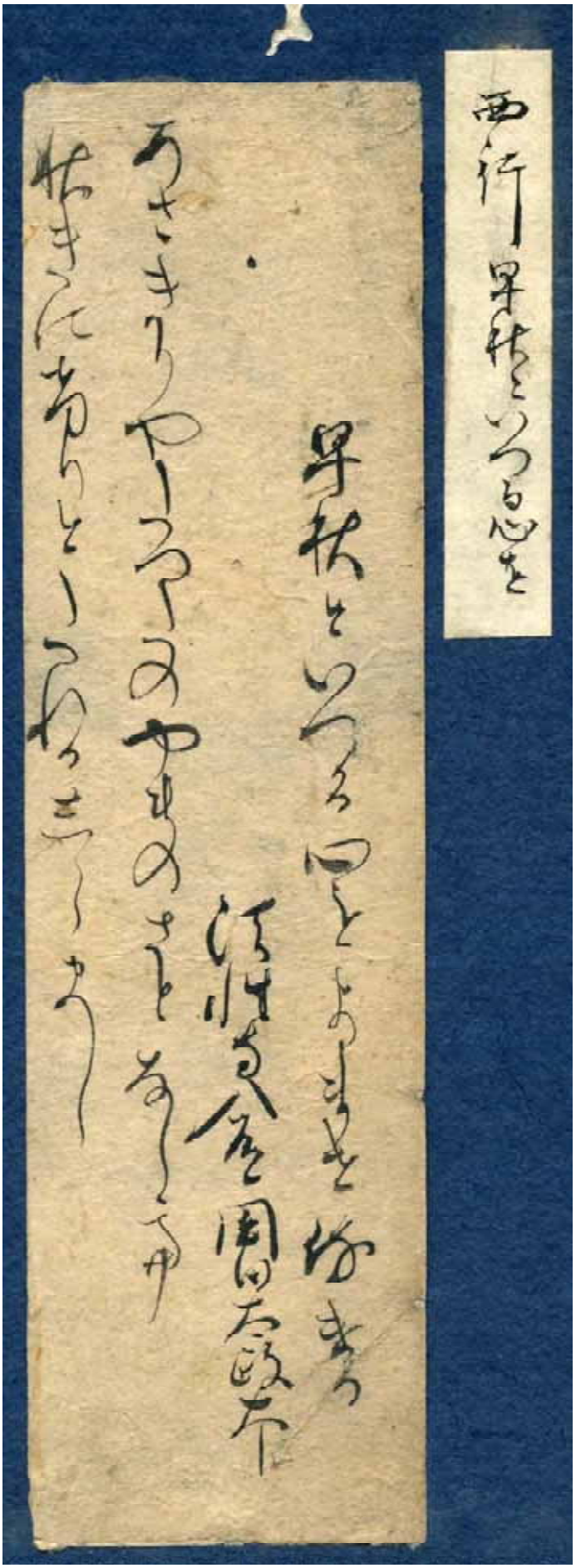
（3）小林強氏:「新古今和歌集古筆切資料集成稿（第一稿）」,『自讃歌注研究会会誌』第7号,pp1-45,1999

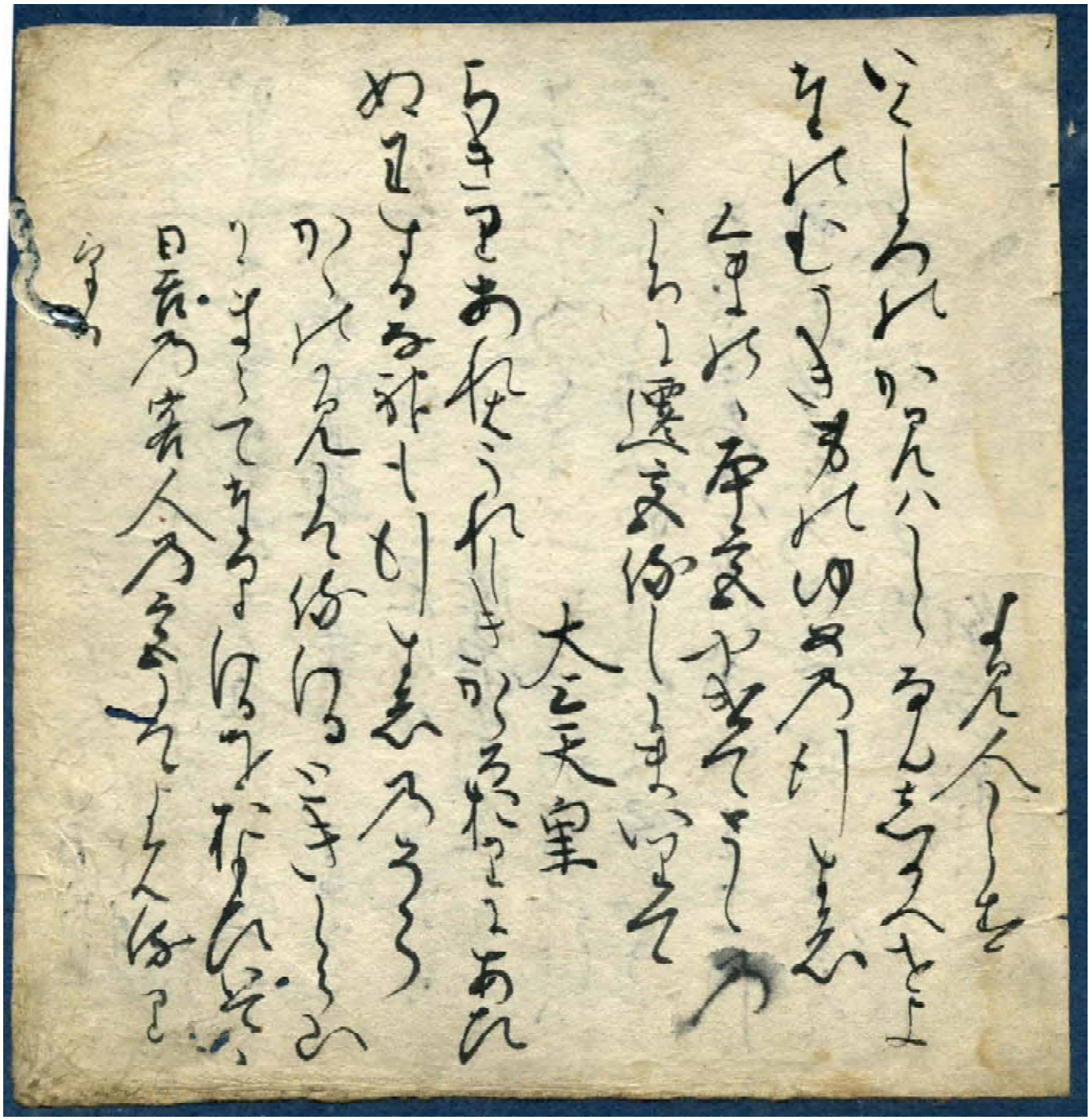
〈付記〉

本稿は平成二一年度神戸市立工業高等専門学校奨励研究助成「古筆切を用いた勅撰和歌集の文献学的研究」による研究成果の一部である。

＊〃Collection of fragment of Shinkokinwakasyu'〃:Kazuya Funami

図版1



図版2

図版3